

第3 問題作成部会の見解

1 問題作成の方針

平成27年度の問題作成に際しては、大学入試センター試験（以下「センター試験」という）の目的と性格及びその役割を考慮し、従来の方針を継承しながら、平成11年3月告示の高等学校学習指導要領の理念に沿って、可能な限り新味を加えつつ、受験者の学力を検出できるように配慮した。また、論理的思考力と感受性、表現の読解力をバランス良く兼備した学力の重要性を考慮し、その達成度を判定できるものとすることを目指した。

以下は、問題作成部会として特に留意した点である。

- (1) 問題は昨年と同様に4問とし、「近代以降の文章」から評論と小説各1問、「古文」1問、「漢文」1問の配列とし、200点（各50点）の配点、80分の問題とした。
- (2) 出題の範囲は、高等学校における教育課程の実施を踏まえて、「国語総合」「国語表現Ⅰ」の教科書レベルとし、受験者の基礎的かつ基本的な学力が反映されるように配慮した。また、受験者の思考過程に沿った設問及び設問形式となるように工夫し、各設問の難易度がバランスの取れた問題となるように考慮した。
- (3) 問題の構成は、高等学校の国語教科教育の実態に即して、基礎的かつ基本的な学力が検出できるものとなるように配慮した。また、受験者の文章読解や思考過程の流れに沿う問題構成となるように工夫し、難易度においてバランスの取れた設問構成となるように考慮した。
- (4) 問題文、設問、リード文及び各選択肢の吟味には細心の注意を払うとともに、基礎的言語能力・認識力・想像力・判断力を含む総合的な国語能力を問うものとなるように工夫し、論理的な思考力と感性的な鑑賞力、及び国語表現能力も判断できるように配慮して問題作成に当たった。また注を適宜補い、受験者の理解の一助となるよう工夫した。

2 各問題の出題意図と解答結果

問題ごとに、問題文の選定と出題意図や工夫を述べ、併せて受験者の解答結果を踏まえた試験問題に関する考察を述べる。

第1問 北垣徹「運動する認識」（『世界思想』第40号、平成25年4月）。32頁上段1行目（冒頭部）（「何かモノを見るには、視点の確保が必要だ」）から35ページ上段10行目（「というよりも、身体がすでに一種の媒体であり、認識を生み出す装置なのだ。」）までを使用した。人間の認識の仕組みについて、時代的な背景を基にしながら論じた文章である。諸説の紹介を理解するのが、やや煩雑な面もあるが、注を有効に使うとともに、設問で読み方をリードするなどの工夫をすることで、標準的な難易度にすることが可能となった。字数は約4200字。問1は漢字問題。音訓の読みを交差させるなど、工夫をしている。問2、問4は傍線説明問題。基本的な本文理解の問題である。問3は本文内容の具体例を本文以外から考えさせる問題で、新傾向の問題である。問5は本文の結論部全体の理解を問う問題で、設問を順を追って解いていくことで、理解ができるように工夫した。問6は表現に関する問題である。八つの選択肢から、適当でない選択肢二つを選ぶことが、受験者の大きな負担にならないよう、設問の中身を第1段落から第12段落へと並べることで負担の軽減を図った。

第2問 大庭みな子の小説「紅茶」（初出：『明日の友』秋号、講談社、昭和52年、出典：『大庭みな子全集3』講談社、平成3年）から全文を出題した。主人公の老女は70歳。夫に10年前に先立たれている。結婚後の人生の大半を子育て、孫育てに費やし老境に至っている。作品前

半の孫娘との会話からは、自己の欲望を^{あら}露わにせず家族に配慮しつつ生きる老女像が浮き彫りにされる。老女と慕い合う老人は77歳。5年前に妻を亡くしている。老人もまた、息子や息子の嫁との交渉から疎外感を感じつつ、残りの人生を好きなように生きたいと願っている。老女と老人は静かな交際を続けているが、物語後半で、ある日の暮れ方の二人の交渉が穏やかに描かれ、老人は彼の発話から、老女は彼女の心内描出から、それぞれの欲望を肯定的に捉えている場面で物語は終わる。

受験者には、二人の思考・感情及び老人を前にしての老女の少女のような風情、これと対比的な家族の様子を把握させることで、老境の主人公たちの充実した生への欲求を読み取らせることを意図した。字数は約4540字である。

語句の意味を問う設問で、誤答選択肢として、該当語句と入れ替えやすいものを設定して出題した。受験者は意味を考えずに該当語句と入れ替えやすいものを選んだ姿が見て取れた。語句の辞書的な意味を踏まえた上で、文脈上の意味も正確に捉ええる力を見ることのできる適切な問題であった。また読解の設問で、身近であるが想像力を必要とする老人に関する内容に関して、正答を導くのに苦慮する姿が見て取れた。文章を丁寧に読み、根拠を持って想像する力を見ることができる設問を作成できた。

第3問 出典は、室町時代の物語『しぐれ』の一節である。大学受験レベルの語彙力・文法力を身に付けていれば、さほど読解が困難ではないと考える。出題は、主人公の中将が自分の意に添わない結婚相手の家に通い始め、呪詛によって本当に好きな女性のことを忘れてしまい、その女性が悲しむという場面であり、受験者にとっても興味を持って読み進められる文章といえる。人物関係はリード文と注によって受験者の理解を助けるようにした。個別の問題は、語句や文法事項を問うとともに、登場人物の心情や行動についての理解力、和歌についての知識もはかることができるように設定している。本文は約1500字。

問1 語句の意味を問う問題。(ア)は「夕さり」・「よも」を、(イ)は「さてあるべき事」を、(ウ)は「跡を暗くする」・「ばや」を、文脈を踏まえつつ適切に理解できているかを問う。

問2 文法問題。基本的な助詞や助動詞などが理解できているかを問う。助詞・助動詞の用法や種類の識別を確認した。基礎を押さええていれば容易に解ける問題であるため、選択肢を一つ増やすことでやや難易度を高めている。

問3 北の方の心情を問う問題。中将に対してだけでなく、自分の家へ対する気持ちの内実も捉えられているかを問う。北の方の会話や前後の文脈が理解できれば、解答は容易だと考える。

問4 三条の姫君の心情を問う問題。直前部分でないところに姫君の心情の原因があり、本文全体に目配りが行き届いているかを確かめるところがポイントである。受験者が本文の全体像を把握できているか、確かめることができた。

問5 和歌の内容を問う問題。本文の内容を把握しつつ、歌中における表現の意味内容が理解できているかを問うもので、識別力の高い有効な問いだったといえる。

問6 本文における登場人物の行動や心情が丁寧に読み取れているかを問う。合致しないものを選ばせることで受験者に注意を喚起するとともに、誤答選択肢からは本文の内容が確認できるように配慮した。

第4問 出典は『琴操』（『太平御覧』巻409所収）である。登場人物の心情を読み取り、「三士窮」という曲に込められた思いを考えさせた。その際には、感情の高ぶりを強調する感嘆表現や反語表現を中心に、漢文法を踏まえた上で、物語を深く味わえているかどうかを問うよう心掛けた。文字数はやや多いが、友情を主題とする物語は身近で比較的理解しやすいものだったと思われる。

以下では各設問について述べる。問1は漢文で常用される文字の意味を問うたが、十分理解している受験者は多くなかったようである。問2は、文脈に従って三つの指示代名詞が指す人物を読み取れているかを問うた。問3は漢文の基本的な句法を理解し、文意を正しく読解できているかを見た。問4は文章全体から主人公の性格を理解し、空欄を補充する問題であったが、解答を導く語が設問部分とは離れていたために、とまどった受験者もいたようである。問5は漢文学習の基本的な問題として、白文に返り点を付け、書き下し文に直すことができるかを問うた。白文に接する機会が減り、不得手とする受験者が多かったようである。問6は登場人物の心情と主人公の行った行動について正しく理解できているかを問うた。問7は文章の流れに沿い、漢文の基本的な語法に従って、適切な語を選べるかを問うた。各選択肢に書き下し文を示したが、助字を選ぶことは受験者にとって難しかったかもしれない。問8は文章全体を理解し、主題を正しく読み取れているかを問う問題。問題文末尾の「相与別散之志」という語から、「三士窮」という曲の、悲壮でありながらも美しい音色が想像できるかどうか、本問題最後の設問として問うたものである。

3 出題に対する反響・意見等についての見解

第1問は、論理構成が堅固で、読み応えがある本文であるという意見があった。問1の漢字問題は、基本的な漢字であった。問2はやや易しかったが、後半の設問への導入の意味もあり、許容される難易度だと思われる。問3は本文の内容を、実感的に理解できているかを問うために、本文以外の例を選ばせる問題とした。問4、問5共に、抽象的な概念の内実の理解度を問うた。問5は傍線を引かず、指定する複数の段落内を読ませて正解を導くようにしたが、特定の段落だけを読めば、正解が導けるとの指摘があった。問6は八つの選択肢から二つの選択肢を選ぶ設問で、受験者の負担が大きいとの指摘があった。更に工夫が必要か、検討課題としたい。

第2問については、「老人の恋心」がテーマとも考えられ、身近な他者に対して想像力を持たせたいという意図が感じられたとの評価を得た。センター試験としておおむね妥当な難易度の問題であったと判断できる。視点の変わり目に問いを設定しなかったという指摘があったが、主人公の老女に関する設問とともに老人に関する設問も設定することでバランスを取っている。問4は、独特な語句の意味内容を理解した上で解答しなければならず難易度は高かった。実際、老人の気遣いを読み取らせることは難しかったとの指摘があった。しかし、第2問全体としては、平易な問題が多かったので、識別力は逆に高くなったともいえる。

第3問については、素材文は読みやすく、おもしろいとの評価をいただいた。人物関係図や施した注が、受験者の理解を助けるのに有効だったものと判断できる。設問は、文脈に沿って内容や登場人物の心情を問う適切なものとの評価をいただいた。内容確認問題で「合致しないもの」を選ばせることを疑問視する御意見もいただいたが、これは受験者の内容理解を助ける側面も持ち合わせての意図であった。設問の在り方を今後も検討していきたい。

第4問については、字数も設問数も多かったにもかかわらず、理解しやすいとの評価を得ることができた。また、設問についてもおおむね適切・妥当と評価していただいた。基本的な問題、標準的、やや難しい問題を配し、オーソドックスな出題とした点に理解をいただいたことは幸いであった。各設問について言えば、問7は、空所補充と書き下し文を組み合わせ、知識理解と内容把握を組み合わせた新傾向の問題と評価された。問6・問8の物語や登場人物の心情を深く読み取ってもらうための問題は、やや重複気味に感じられたようである。

4 今後の問題作成に当たっての留意点

評論問題においては、「国語総合」の水準に留まるよう配慮しつつも、抽象的な思考が一定程度求められる文章を選定し、論理的思考力を問うことを、今後も重視したい。また、各設問においては、正答・誤答の各選択肢を構成する文言を更に精査・精錬するとともに、設問全体の連動性についても十分な検討を重ね、各設問の間で重複や飛躍が生じないように、一層の検討を重ねたい。また、表現問題に関しては、過度の負担が受験者にかかることのないよう、設問に工夫を重ねたい。

小説問題については、問題文の難易度は維持させながら、様々な傾向の素材文を選定したい。受験者にはなじみの薄い内容のものを題材にすることへの懸念もある一方で、異質な他者に対して想像力を持たせ、普遍的なメッセージを読ませることの有効性と重要性も評価されている。素材文の分量の長さについては、今後も受験者の負担にならないように留意したい。

古文問題については、今後も作成に当たっては素材文の難易度を安易に下げることとはせず、分量への配慮や、リード文、注、人物関係図などを適宜補うことを通じて、受験者の負担を減らすとともに、設問によって適度なレベルとなるように留意していきたい。

漢文問題については、持っている知識や論理的な思考によって文章を理解するだけでなく、登場人物や筆者の心情を深く味わう問題を、今後とも可能な限り取り上げたい。語法面では、高等学校の学習成果が反映されるような問題となるように努め、適切な出題形式を更に検討したい。

追・再試験の作成に当たっては、今後とも、本試験との難易度のバランスにも注意を払いつつ、追・再試験自体の難易度の維持に心掛けたい。また、本試験と同様に、教育現場に新鮮なメッセージを送り続けることの重要性も認識した上で、問題作成に臨みたい。